
幸せのタクト

来戸 述

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せのタクト

【Nコード】

N3586T

【作者名】

来戸 述

【あらすじ】

ほんの少しだけ心がすれ違った、二人の受験生のお話??。

お題「指揮者」「コンセント」「大晦日」

僕が加奈ちゃんの部屋に来て、もう一ヶ月が過ぎた。

加奈ちゃんとは地元の高校に通う高校三年生だ。亜麻色の髪を頭の後ろで一つに結んでいる、化粧つ気のないさっぱりとした子。

そんな加奈ちゃんに片想いの男の子がいることを、僕は随分と前から知っていた。

彼は同じ部活の友達で、加奈ちゃんが中学生の頃からずっと好きだった人だ。もう部活は引退してしまっただけで、スポーツ刈りにした黒い短髪がいかにも健全な高校生らしく、少し前にこの部屋に遊びに来たときも好印象を持ったことを覚えている。

そのとき彼は加奈ちゃんにこう言ったのだ。

『ごめん。俺、加奈とは友達のままでもいいんだ』

なんていい人なんだろう。僕はそう思ったのだが、なぜか加奈ちゃんは泣いていた。目を腫らせて、声を押し殺すように、泣き叫びたいのを我慢するようにして、不器用に笑っていた。

僕にはそれが不思議でしよがなかつた。

「ねえ、タクトくん。わたし、どうしたらいいのかな……」

細い指先で、加奈ちゃんは僕の頭に触る。今日は大晦日だった。プラスチックでできた僕の髪の毛が優しく撫でられた。

何も答えない僕に、加奈ちゃんは怒ることもなく、僕の足下にあるスイッチを入れた。パチツという軽い音とともに、季節はずれのクリスマスソングが流れる。

僕は体を捻りながら、規則正しく腕を上下させて拍をとる。手に握った真っ白な指揮棒が振られるたびに、メロディがリズムカルに変化した。

その様子を見て、加奈ちゃんの顔にぎこちない笑みが戻る。

「ふふ、上手だね。タクトくん」

指揮者の持つ棒のことをタクトというから、僕の名前はタクトな

のだという。僕が初めてこの部屋に来たときに加奈ちゃんがつけてくれた、大切な名前だ。

僕は加奈ちゃんを励ますように、必死になって指揮棒を振るった。もうすぐ新年を迎えようというのに、テレビもつけず、薄暗くなつた部屋の中に、僕が指揮するクリスマスソングが流れる。

『これ……クリスマスプレゼント……』

一ヶ月前、元のご主人様の手から加奈ちゃんに渡されたとき、僕はたいそう幸せな気持ちになったものだ。

だって、ようやくご主人様が自分の気持ちを伝えられたと思ったから。

加奈ちゃんは机の上に置いた僕を眺めながら、どこか遠くを見ているような目をしていた。

「わたしじゃ、だめなの？ 拓人くん……」

腫れぼつたい目がしだいにうつらうつらとしていき、加奈ちゃんはゆっくりと目を閉じていった。

違うんだよ、加奈ちゃん。あの人はね

僕は歌詞以外の声が出ない喉で、必死にあの人の想いを加奈ちゃんに伝えようとした。指揮棒を振り回し、体を捻り、それでも伝わらない想いを。

僕の体からだんだんと力が抜けていく。それが電池切れだということ。これは疑いようもない事実だった。

加奈ちゃん、あの人は本当はね

『うつ……女の子ってどうなのが好きなんだろうな。クリスマスに貰って嬉しいものなんてわかんねえっての』

『おっ、これなんかよさそう。なにに……指揮者型電子オルゴール。へえ、加奈の好きそうな曲じゃん』

『ああ、店で包んでもらえばよかったな。でもクリスマスまでまだ何週間もあるからな……。おい、おまえ、ちゃんと動けよ。高かったんだからな』

『げっ、またD判定かよ。これじゃあ加奈と同じ大学行けねえって。

うわあ、やっぱり恋にうつつを抜かすなっでことか……」

『おい、おまえ。俺も勉強がんばるからよ。おまえもしっかり加奈のこと応援するんだぞ。クリスマスが終わったら用済み、だなんてことがないように、まじめに働くんぞ』

『これ……クリスマスプレゼント……。べ、別に、たまたま店にあつたから、おもしろそうだなあつて思つて買っただけだよ。深い意味は……えっ、俺にもプレゼントあるの？ ……あ、ありがとう』
『ごめんな。俺、加奈とは友達のままでもいいんだ。受験が終わつたら……いや、なんでもない』

薄れゆく意識の中、僕は無我夢中で指揮棒を振つた。

翌朝、なのだろう。僕は朝日に照らされる机の上で目を覚ました。足下の台から延びるコードが、隅の方にあるコンセントに差し込まれている。充電中のランプが赤く灯っていた。

見上げると、加奈ちゃんの明るい笑顔。その顔に、昨晚の悲しい表情はない。

「タクトくん。私、諦めないことにしたから。まだ拓人とは友達なんだもんね。がんばつて勉強して、拓人と同じ大学に行つて、それからでも遅くないよね」

ふと見ると、着ている服は着物である。桃色のシヨールが肩に掛けられ、腰には薄青色の帯が巻かれていた。

「これから拓人と初詣なの。向こうから誘つてきてくれたんだよ。一緒に行こうつて。同じ大学に合格するようにお祈りしようつて。じゃあ、行つてくるね」

飛び跳ねるようにして部屋を出ていく加奈ちゃん。しかし、すぐに戻ってきて、にこつと笑つた。

「言い忘れてた。タクトくん、あけましておめでとつ。今年もよろしくね！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3586t/>

幸せのタクト

2011年5月18日15時31分発行